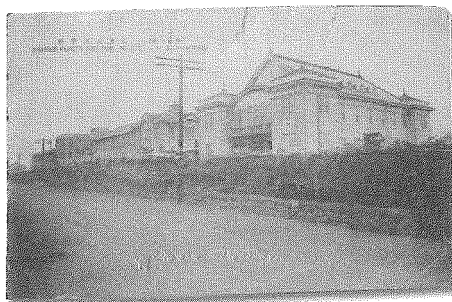
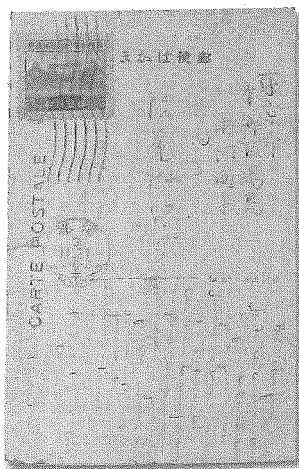


邦之助からの葉書

江口 修

すでに終えた筈の調査・研究ではあるが、貴重な資料を閲覧する機会を得たのでその内容についてここに記して置こうと思う。まずは画像として紹介する。



一見して、本文のフランス語に目がゆくが、宛名の書き方が日本式であり、「郵便はがき」とある。裏返すと洋館風の建物だが、小樽高商を知るわれわれにとっては親しみを感じさせられるものだ。そして日本語で「(濱松名所) 高等工業学校」、英語で“FAMOUS PLACES AND FINE PROSPECTS (HAMAMATSU)”とある。PROSPECTS をスペルミスしているところが微笑を誘う。この高等工業学校は現在の静岡大学工学部であり、HONDAの創業者本田総一郎が聴講生で在籍したことが記録に残っている。じっくり観察すると、消印は「浜松、3. 11. 27」となっている。昭和三年十一月二十七日に受け付けた葉書ということになる。宛先は「東京市本郷区湯島両門町十二 竹内方 松尾正路 兄」とある。差出人は消印に隠れていることもあり、また擦れが激しいが「浜松市外高林 中村農園内 邦」と読める。当然われわれが調査・研究してきた松尾邦之助その人であろう。以下この絵葉書の内容とそれにまつわる諸情報をすこしばかり述べておこう。

*

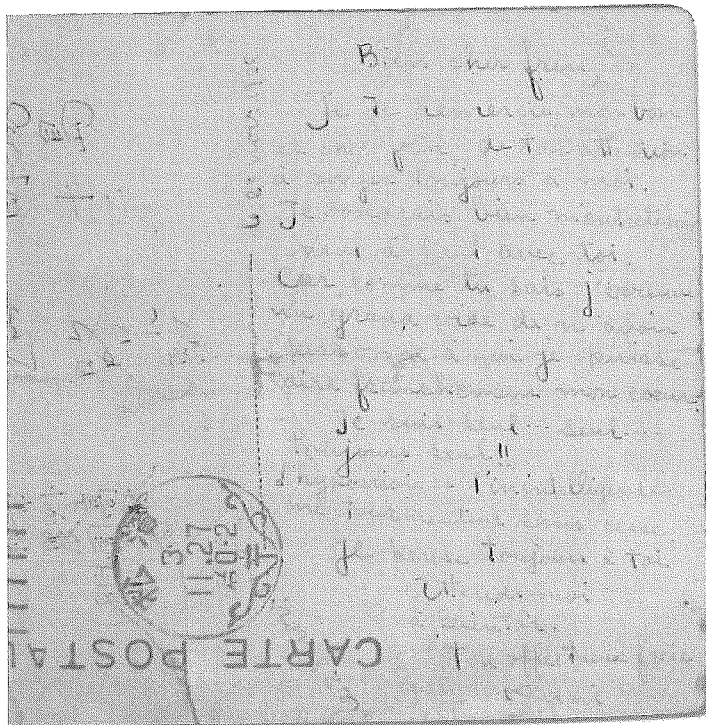
この資料の出処についてであるが、われわれの研究を当初よりフォローしてくださっている北海道大学名誉教授で米文学研究の泰斗であられる片山厚先生より「義父松尾正路の遺品を整理し

ていたら出てきたもので、仏語で書かれているので」とお送りいただいたものである。つまり、片山先生の奥様は松尾正路先生のお嬢さまであり、邦之助の姪にあられるということになる。合縁奇縁とはよく言うが、筆者が本学の創立100周年記念を機に松尾正路先生の足跡の確認から始まって邦之助探索へと進んで行ってなければ、この絵葉書がわれわれの目に触れることはなかったのではないだろうか。

さて、日付から当時の二人について確認しておこう。正路は大正14年3月東京外国語学校を卒業2年後すなわち昭和2年4月に第一外国語学校仏語講師に採用されている。小樽高等商業学校に赴任するのが昭和4年4月30日であるから、東京時代最後の年の師走を迎えようかというときにこの葉書を受けとったことになる。東京の当時の街区圖を調べてみると東京帝大の南東端に隣接した区域となっているが、東京外国語学校は神田錦町三丁目にあったことから正路の東京での学生時代からの住居（おそらくは学生相手の下宿屋）だったと考えてよいだろう。では邦之助の方はというと、父の病重篤ということで一時帰国中であつた。差出人住所にある中村農園というのは現在も同名の農園が浜松市にある。おそらく引佐町^{いなさ}の実家で親族たちとひともめあつたのだろうか、中学時代の友人をたよって一時避難をした先だと想像すると腑に落ちるところがある。結局は折れて、翌年正路が小樽に赴任する前の三月に村越ひろと結婚し4月にはフランス行きの船客となっている。松尾兄弟にとって忘れがたい年ではあつただろう。

**

いよいよ内容である。文章を拡大して見ておこう。



判読し難い部分もあるが、起こしてみると次のようになるだろう。

Bien cher frère,

Je te remercie, mon bon et cher frère,
de ton attention à songer toujours à moi.

Je voudrais bien m'entretenir
seul à seul avec toi.

Car comme tu sais, j'éprouve
un grand vide de n'avoir
personne à qui je puisse
dire franchement mon cœur.

Je suis seul... seul...

toujours seul !!

L'hypocrisie et l'inintelligence
me tourmentent sans cesse.

Je pense toujours à toi.

Attends-moi

& (à) bientôt.

Ton affectueux frère

Kuni

拙訳しておくならば大体のところこうなるだろうか。

親愛なる弟よ

さて良き人にして親愛なる弟よ、常日頃私の
ことを心にかけてくださり心より感謝します。

兄とは親しく相対にて話しできればと思ひ
ます。

と申すのも、ご存知のとおりここでは
胸襟を開いて話せる者がおりません。

私は孤独、、、孤独、、、

常に孤独です !!

偽善と無知が

私を絶えず悩ませています。

常に兄のことを思っています。

私のことを待っていてください

近いうちに。

あなたのことを思う兄より

邦 (Kuni)

さきほど「親戚とのひともめ」と書いた根拠が「偽善と無知が私を絶えず悩ませています。」という一文である。すでにパリに馴染んでしまった邦之助にしてみれば、家を中心に世間で成り立っている旧態依然の日本は息苦しい限りだったろう。自分の後を追うように東京外語の仏語に入った弟正路のみが理解者と思えたことも当然である。そして用意周到というか、葉書でいかにも簡単な挨拶を装って、さらにフランス語で書くことにより万が一にも地元遠州の人たちに内容が漏れないにしたのであろう。

さて、帰国した邦之助を説得し家を継がすべく画策する周囲との悶着の結果は、身を固めた上での再度渡仏という妥協であったようだ。しかし、東京での知己との再会などをきっかけに、爾後パリでの人生が大きく開けて行ったことを考えると、この一時帰国はけっして無駄ではなかっただろう。

まだまだ大正デモクラシーや浪漫趣味の息吹が残る昭和初期、本文がフランス語で記された一葉の葉書が浜松から東京湯島まで旅をし、それが今なお札幌の地に残されていることに筆者は歴史の奥深さとまだまだ探究すべきことのあることを思い知らされるのである。